

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第437号 平成24年11月16日

赤ちゃんポスト

2007年5月、熊本市の慈恵病院に、育てられない赤ちゃんを匿名でも預かるという「赤ちゃんポスト（こうのとりのゆりかご）」が設置されて以来5年が経過しました。この間、預けられた赤ちゃんの数は80人を超え、その内の大半は新生児だったといえます。

また、預けられた子ども達は、児童施設や特別養子縁組をした親の元などで暮らしています。

この「赤ちゃんポスト」については、開設の話が持ち上がった際、新生児の殺害や虐待、更には育児放棄を防ぐといった賛成意見がある一方で、批判的な意見も多かったように思います。安倍首相が「抵抗を感じる」と述べた事は良く知られていますが、この他にも、

- ・ 育児放棄や捨て子を助長する
- ・ 匿名で受け入れる必然性が曖昧で、これが倫理観の欠如に繋がる
- ・ 子どもの知る権利を侵害している

等、といった意見がありました。

更に、子どもを捨てた親については、保護責任者遺棄罪に該当するのではないか、また、児童福祉法や児童虐待防止法に違反するのではないかといった懸念もあります。

確かに、自分の産んだ子を捨てるという行為は倫理上も許されない事は当然ですし、「赤ちゃんポスト」が子捨てを助長するのではないかとの懸念ももっともの事だと思えます。

実際、「赤ちゃんポスト」を利用した方々が明かした理由の中には、経済的に困窮しているといった事情の外に、不倫や世間体など誠に得手勝手に理不尽なものも少なくなかったようですが、理由はどうあれ、自分の産んだ子を育てられないという親が存在する現実を、我々は直視しなければならないようです。

また、子どもが成長し、自分の親の存在を知りたいと望んだ時、一体誰が責任を取れるのかという問題もありますが、今日、児童虐待は深刻の度を増し、親が我が子を殺すという最悪の事件が後を絶たない中で、「赤ちゃんポスト」が赤ちゃんの命だけでなく、生みの親をも救っているという側面を見逃してはなりません。

慈恵病院では、赤ちゃんが安易にポストに預けられないよう電話相談室を設け、24時間体制で相談を受け付けているそうです。困ったらまず相談できる、そういう窓口が全国にもっとあれば、最悪の事態を減らす事が出来るに違いありません。

ただ「赤ちゃんポスト」については後続く所がないため、慈恵病院によると地元である熊本県や九州よりも近畿や関東地区から預けに来る方の方が多いとの事です。

国においては、こうした現実を踏まえ、様々な事情を抱えながら誕生した命を守るため、「赤ちゃんポスト」を一病院の取り組みに止める事無く、もっと積極的に係わって行く必要があると思います。

また、慈恵病院の蓮田太二理事長は、「子どもは誰から生まれたのかではなくて、誰に育てられたかが重要だ。」と述べ、特別養子縁組にも力を入れています。「赤ちゃんポスト」は、飽く迄も一時的な避難措置に過ぎません。実の親が、「赤ちゃんポスト」に我が子を預けた事を思い直し、引き取ってくれる事が一番ですが、それが叶わなくても、特別養子縁組が広がって行けば、生まれて来た子の幸せに繋げていく事が出来るのではないのでしょうか。その為にも、望まない妊娠をし、途方に暮れている女性が安心して相談出来る窓口を充実させると共に、特別養子縁組がもっと広がるような支援と仕組みづくりが望まれます。

何故なら、生みの親からは望まれずに生まれた命かも知れませんが、全国には、血の繋がらない子でも、自分の本当の子どもとして受け入れ育てたいと思っている夫婦は決して少なくないのですから。(塾頭：吉田 洋一)